

大英図書館との共同企画によるインターネット特別展 「描かれた日清戦争 ～錦絵・年画と公文書～」

国立公文書館 アジア歴史資料センター 研究員

平野 宗明 ひらの・むねあき

1. はじめに

アジア歴史資料センター(以下「アジ歴」)では、このたび、大英図書館(The British Library、以下「BL」)との共同企画として、インターネット特別展「描かれた日清戦争 ～錦絵・年画と公文書～」(英語版“The Sino-Japanese War of 1894-1895: as seen in prints and archives”)を日本語版及び英語版にて公開した(平成26年5月27日)¹。これは、アジ歴にとって、初の外部機関との共同によるウェブコンテンツ作成であると共に、初の海外機関との連携事業でもある。



図1 「描かれた日清戦争」トップページ

本稿では、このアジ歴とBLとの共同企画の経緯と、インターネット特別展「描かれた日清戦争 ～

錦絵・年画と公文書～」の紹介を行いたい。

2. 共同企画の発端

アジ歴とBLとの親交は、アジ歴職員が海外における利活用促進を旨として毎年参加している、EAJRS (European Association for Japanese Resource Specialists: 日本資料専門家欧州協会)の総会の場で培われたものである。これまでに数年にわたってこの会合に参加する中で、アジ歴職員と、同会の常連であるBLアジア・アフリカ研究部の日本資料部門のスタッフとの間ではたびたび情報交換を行ってきた。勿論、BLのアジア・アフリカ部門の閲覧室にはアジ歴のリーフレットを置いていただいている。



図2 大英図書館

平成24年11月、アジ歴スタッフがBL日本資料部門のスタッフから連絡を受けた。当時同館において準備が進められていた、20世紀から21世紀にかけての各国におけるプロパガンダをテーマとする企画展示“Propaganda: Power and Persuasion”(公開期間は2013年5月17日～9月17日)に、日本資

料部門からも日清戦争を描いた1枚の錦絵を展示することになったが、これを機に、この錦絵を含む全235枚に及ぶ日清戦争関係の版画類コレクションの整理を行い世に出したいと考えているものの、どのような手段をとったものか悩んでいる、何か良いアイデアを出してもらえないだろうか、とのことであった。

我々としては、BLにそのようなコレクションが存在していることに驚くと共に²、内容検証や書誌情報の採取について、出来得る限り協力したい旨を伝え、双方の間で情報交換が始まった。

その後、BLスタッフの来訪などの機会を通じ、BLからは、当該資料群をデジタル化した上で、アジ歴で活用することはできないかとの提案が寄せられた。アジ歴の事業内容や実績を見て、版画類というビジュアル資料を歴史資料として世の中に示すためには、アジ歴がパートナーとして最適であると考えているということであった。これは誠に嬉しい提案であった。即座に、BLの版画類とアジ歴の公文書とを用いて、日清戦争(1894年～1895年)をテーマとするインターネット特別展を共同企画というかたちで制作しようという方向性がまとまった。

3. テーマと資料についての問題点

しかし、この共同企画の構想には、いくつかの非常に重要な問題点が存在していた。

まず何より、テーマが日清戦争だということである。折しも、日中関係が緊張感を帯びつつあるこのタイミングにおいて、日清戦争を扱ったインターネット特別展をアジ歴が世に出すということは、果たして適切であるか、という懸念は、アジ歴側内部の議論においてすぐに立ち上った。

そして第二に、アジ歴が公開しているのが公文書であるのに対して、今回取り扱う資料が版画類というまったく種類の異なる資料であるということである。特に、これらの版画類はいずれも日清戦争当時作成されたものであり、プロパガンダの性質が極めて強いものである。出し方によっては、その描かれ方自体が、それを提示する我々のスタ

ンスとしてユーザーに受け取られる危険性はないのか。そして、こういった恣意的ともいえる性質を持ち得る資料を、公的な性質をもつ公文書と組み合わせることは、資料の見せ方として相応しいのか。

共同企画の実施の是非を組織として判断する上では、このような問題点にどのように対処するかということが鍵となった。しかしながら、これらについての解決はやはり、アジ歴が本来のスタンスを守るということにあるという結論に達した。すなわち、どのような資料であれ、それに分析や解釈を加えずあるがままにユーザーの閲覧・利用に供する、資料の提供においては政治的な要素を持ち込まず中立性の維持に努める、ということである。このような根本理念ともいべきスタンスは、図書館という異なる性質の機関であるBLとの間でも間違いなく共有されていることであり、両機関はごく自然に足並みをそろえることができたのであった。

また、中立性という点において極めて重要なポイントとなったのは、BLの版画類コレクション全235点の作品の中に、清国製のものが56点含まれているということであった。プロパガンダ性の強い資料であるという点は日清双方の作品に共通していることであり、それならば、日本の作品も清国の作品もあわせて紹介することで、視点の相対化をはかることが可能ではないかと考えることができたわけである。

こうして、この共同企画の実施が決定され、BLとの間では、インターネット特別展の制作にあたって次の点を配慮するということが意見が一致した。まず、同一の対象を描いた日本製作品と清国製作品の双方の画像を可能な限り並置して掲示すること、次に、画像には作品に記された文章の翻刻や作品の内容解説を付さず、描かれている出来事の内容とその日時・場所を示すキャプションを添えるにとどめること、そして、中心的コンテンツにおいては、日清戦争の経緯に沿って各戦闘等の出来事を描いた版画類を紹介しつつ、これに関連する主な公文書をリストアップする、という

簡潔なものとする、ということである。これは、こうした形をとることで、当時の日清両国の人々が日清戦争をどのように捉えどのように表現したのか、ということを示す歴史資料として版面類を位置付け、これに公文書に記された関連情報を重ねあわせることによって、描かれている出来事を立体的に捉えることが出来るようになるだろうという考え方によるものである。勿論、扱える公文書は日本のもののみとなるが、この点についてもし問題提起をされるのであれば、それが中国をはじめとする他国の資料に対するユーザーの関心を引き起こすきっかけとなれば良いと考えている。

4. コンテンツの制作

インターネット特別展のタイトルは、上記の考え方も踏まえつつ、日本語では「描かれた日清戦争 ～錦絵・年画と公文書～」、英語では“The Sino-Japanese War of 1894-1895 : as seen in prints and archives”とした。制作は日英版の同時制作であった。両機関の役割分担は、アジ歴が、①日本語テキストの作成及び提供、②ウェブコンテンツの作成及び配信。BLが、①アジ歴から提供された日本語テキストに基づく英語テキストの作成及び提供、②所蔵する版面類のデジタル撮影及びリストその他関連情報の整理、③上記版面類のデジタル画像及びリストその他の関連情報の提供、であった。

制作にあたっては、書誌情報の整理という作業は重要な課題であった。基本的には、既にBLにおいて採取し整理されていた基礎的な書誌情報を基にしつつ、いくつもの情報を付加し、可能な限り充実した書誌情報を整えることを目指した。

実は、全235枚の版面類のデジタル画像は、いずれもBLのポリシーに従い、1画像あたり1MB以下の容量にとどめるかたちで使用することにより、すべてパブリック・ドメインに属するものとして扱うことになっている。すなわち、このインターネット特別展で公開されている画像を対象とする限り、ユーザーは一切の制限なしで二次利用することが可能である。だからこそ、これらの資料が

何であるのか、という情報をしっかりとユーザーに示したいという考え方があった。

しかし、この書誌情報の整理は極めて困難な作業であった。版面の題名を読み取ることが出来るか否か、作者名を特定することが出来るか否かに始まり、BLのスタッフが何より苦心したのは、これらの情報をどのように英語で表記するか、ということである。固有名詞については、例えば、清国の地名であれば、漢語ピンインとウェード式という2つの表記法が考えられ、朝鮮の地名であれば、文化観光部2000年式とマッキューン＝ライシャワー式という2つの表記法が考えられる。またその一方で、あくまで書誌情報として、原表記の読みをローマ字表記する必要もあり、この場合は、日本製の作品であれば固有名詞の日本読みを特定せねばならず、清国製の作品であればその中国読みを特定せねばならないのである。これらについては、BLスタッフの豊富な知見と周到な配慮に頼りつつ両方で検討を重ね、最終的には、学術的な判断に加え、英語圏における慣習的な表記法も考慮に入れながら整理していった。その成果は是非とも実際のインターネット特別展上(「ギャラリー」、下記5. 参照)で確認されたい。

以上の表記の問題は、地図や年表をはじめ、コンテンツ各所で登場する固有名詞全般の表記においても同様であったが、いずれも書誌情報における検討を基に整理を進めることができた。

5. コンテンツの概要

こうして制作されたインターネット特別展の主なコンテンツの概要は次のとおりである。

【イントロダクション／Introduction】特別展のねらいや共同企画の経緯についての説明、アジ歴とBLからのメッセージを紹介。

【日清戦争とは／About the Sino-Japanese War of 1894-1895】全5章構成で、日清戦争の背景や概要を、関連する公文書を交えながら文章で説明。

【メインページ／Main Feature】中心となるコンテンツであり、日清戦争の展開を示した地図と年表の項目をクリックすることで、それぞれの出来

事を描いた版面類と、関連する公文書を紹介する個別ページが展開する。



図3 メインページ

【トピック／Topics】全3回で、作品の題材や描かれ方に関するいくつかのトピックにもとづいて版画を紹介する。

【ギャラリー／Gallery】BLの日清戦争関係版面類全235枚のコレクションを紹介するデジタル・ギャラリー。コレクションの来歴についても解説している。

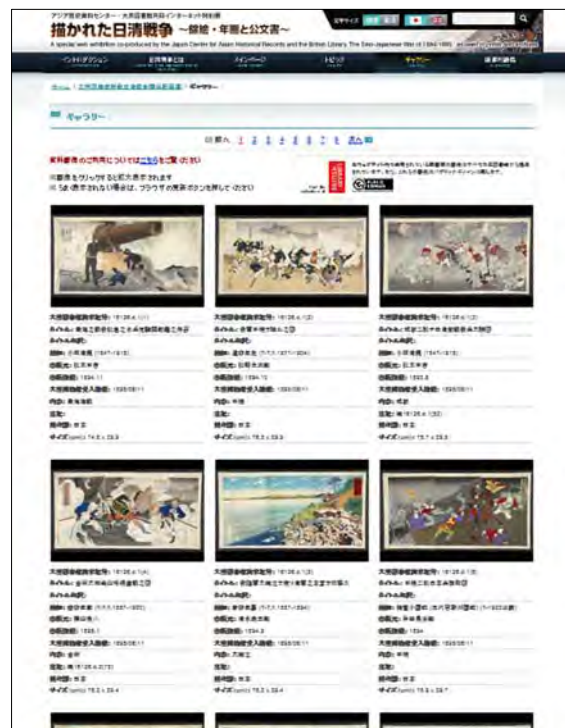


図5 ギャラリー



図4 個別ページ

【関連用語集／Glossary】特別展内で登場する主要な人物、場所、組織や制度、出来事などをリストアップし解説する。

【参考文献表／Bibliography】特別展の制作においてアジ歴及びBLが参考とした文献及び関連文献をリストアップしている。

6. おわりに

インターネット特別展「描かれた日清戦争」の公開は、平成26年5月27日であり、同9月10日には第1回目の更新を実施している。この時点で、上記4.で紹介したコンテンツのうち、「日清戦争とは」「トピック」は初回分のみの公開であり、今後追加していく予定である。また、「メインページ」から「個別ページ」が展開する項目もまだ一

部なので今後追加し、「関連用語集」も以上の追加内容に合わせて用語を増やしていく予定である。

今後の展望としては、当面は、上記のようにコンテンツの拡充を進め、最終的なかたちに上げていくことが重要である。またその一方で、国内はもとより、今回の共同企画のきっかけとなったEAJRSなどの場を利用してBLと協力しながら、海外に対しても、このインターネット特別展の広報を行っていきたいと考えている。それは勿論、アジ歴自体の利活用促進をはかるという意味合いもあるが、これに加えて、他機関との連携の可能性をさらに切り拓いていきたいという気持ちによるものでもある。

近年、文書館、図書館、博物館等々のさまざまな機関の間で、機関間連携の試みが多くなされて

いる。1つの機関だけでは、自らの持つ資源（資料・情報・人材・予算）の限界を超えた成果、自らの所蔵資料（コレクション）の持つ枠組みを超えた成果を世に出すことが難しいことも多いが、異なる機関が資源や知見を持ち寄ることによって新しい可能性を開くことができるからであろう。今回のアジ歴とBLの共同企画も、両機関の資源と知見を併せたことによって、結果として、〈図書館と文書館〉〈絵画資料と公文書〉という組み合わせを実現する試みとなった。

アジ歴が今後目指すべき方向性の1つとして、外部機関との連携という強力な「武器」を得ながら、デジタル・アーカイブの多様な表現の可能性というものを追求してみたいと考えている。

¹ 日本語版URL:<http://www.jacar.go.jp/jacarbl-fsjwar-j/index.html>

英語版URL:<http://www.jacar.go.jp/english/jacarbl-fsjwar-e/index.html>

なお、当該ウェブサイトヘッダーにある言語切り替えボタンによって、日本語版と英語版の行き来が可能である。

² 大英図書館所蔵日清戦争関係版画類コレクションの来歴や全容については、インターネット特別展「描かれた日清戦争 ～錦絵・年画と公文書～」の「ギャラリー」冒頭に記された解説を参照されたい。